第２回歴史的場所に立つ良心の博物館アジアネットワーク地域会議（2^{nd} Network Meeting of Asian Sites of Conscience）に参加して

兼清　順子

虐殺や戦争、奴隷制度など、人びとの良心を問うような歴史を展示し、人権や寛容性の大切さを訴えることを使命に掲げる博物館は、1990年代以降増えている。バングラデシュの解放戦争博物館の事例を通して、こうした博物館の活動の意義と課題を紹介する。

１　はじめに

博物館の起源は古代ギリシャにさかのぼることができる。現在私たちがイメージする「コレクションを収蔵して展示する館」も少なくとも数百年の歴史を持つ。その中で、平和博物館は極めて新しい存在である。世界最初の平和博物館は1902年に実業家であり平和研究者であったブロッホがスイスに建設した戦争と平和のための博物館だといわれている。はじまったばかりの平和博物館は、自らをいかに定義するかという、学問的な入り口にようやくたどり着いたところである。

だが、1990年代以降、平和博物館の数は世界的に増加している。B・キルシェンバルトーギンブレットはこうした博物館をMuseum of Conscience（良心に訴える博物館）と呼び、その特徴と増加の背景を分析した。

Museum of Conscienceとは道徳意識や良心の博物館という意味になるが、人類が道徳的に失敗した、ジェノサイドや、奴隷制度、アパルトヘイトなどの歴史を展示し、来館者の良心を問うことを目的とした博物館である。1999年には、ニューヨークのテーンメント博物館（Lower East Side Tenement Museum）の呼びかけで、世界各国の９博物館による「歴史的場所に立つ良心の博物館の国際連合」（International Coalition of Historic Site Museums of Conscience）が発足した。また、2001年には、国際博物館会議内にも、「公共に対する犯罪犠牲者追憶のための記念博物館国際委員会」（ICMEMO : International Committee of Memorial Museums in Remembrance of the Victims of Public Crimes）が設けられている。これまでの日本の平和博物館の議論に照らせば、平和を追求する文化を展示するタイプの博物館ではなく、戦争博物館の分類に入るが、軍事的な成功を宣伝するための軍事博物館ではなく、反戦平和のために戦争の歴史を展示するタイプの戦争博物館に近い。

キルシェンバルトーギンブレットによれば、こうした博物館増加の背景には、世界的な人権への問題意識の高まりと、冷戦の崩壊による歴史調査の本格化がある。さらに冷戦崩壊後の紛争増加でこうした博物館が対象とする事例が増加したという皮肉な要因もある。また、博物館がアイデンティティをめぐる政治の道具となったために、博物館も少数者や他者をいかに展示するか、歴史のどの側面をとりあげるかという問題をつきつけられるようになった。そのため、歴史遺跡や博物館も自らの展示や研究の道徳性を意識せざるをえなくなった。そして、「コレクションを母体として、それを展示することを目的とした館、収蔵品を理解してもらうために教育をする場所」ではなく、普遍的な人権の問題という社会全体の課題へ取り組むことを目的とする博物館が増加したのである。誤解のないように述べれば、これは、従来のコレクションを守る機能を軽視することではなく、新たな役割をも引き受ける施設である。

「歴史的場所に立つ良心の博物館の国際連合」を呼びかけたテーンメント博物館は、「世界をより良い場所にするために歴史に何ができるか」問い、マンハッタンへの移民が多様な背景を持っていた歴史を示すことで、他者に対する寛容性を広めることをミッション（博物館の使命）としている。そして、「ミッションに突き動かされた博物館」として、博物館のすべての部門でこれを体現すべく、雇用体制や近隣コミュニティとの対話においても、他者に対する寛容性（新たな移民を受け入れることや、彼らの努力を支えること）の価値観が反映できるよう取り組みを続けている。Museum of Conscienceとは、社会問題への取り組みを柱とする博物館である。

2　第２回歴史的場所に立つ良心の博物館アジアネットワーク地域会議

2007年９月７日～10日、バングラデシュのダッカおよびコミラで「歴史的場所に立つ良心の博物館の国際連合」のアジア下部組織が主催したアジアネットワーク会議が開催され、博物館活動を通じて平和創出を目指す博物館同士の国際的な協力が深められた。

参加者は、インド、フィリピン、タイ、パキスタン、カンボジア、日本、バングラデシュの７カ国の計28名で、バングラデシュからは、会議のホスト博物館である解放戦争博物館（LWM）の理事らのほか、国際博物館会議関係者や国立博物館関係者、ダッカ大学教授などが出席した。

参加博物館の活動内容の発表と討議、ネットワークの今後の活動に関する討議、ダッカの虐殺記念碑視察、解放戦争博物館の視察、解放戦争博物館が実施する移動博物館プログラムの視察を通して、Museum of Conscienceの取り組みの様子と、直面する課題を見ることができた。

アジアネットワーク会議は、参加する各博物館の事情に合わせたネットワーク作りを目指し、各館ができる範囲で取り組むことを奨励している。今回の会議では、各館で10月２日(国際非暴力デー)を記念することと、１月30日～２月５日にサバルマティ・ガンジー・アシュラム（Sabarmati Gandhi Ashram）にてユースキャンプを行い、各館より参加者を送ることを決定した。また、各館の活動をメールで共有することも提案された。

アジアネットワーク会議プログラム

９月７日（ダッカ、バングラデシュ）
AM11：00　ポンプハウス虐殺跡　視察
1971年に約5000人が虐殺された場所。1999年に発掘が行われ、本年、整備された。レンガ造りの庭園、壁画、記念碑、記念室、ガゼーボがあり、敷地は狭いが、バングラデシュ全土の虐殺と二十世紀のジェノサイドの碑がある。LMW理事による趣旨説明、献花、生存者４名の話を聞いた。
PM１：00　虐殺の記念公園視察
川沿いのレンガ工場地帯の虐殺モニュメント。この場所で多くの知識人が殺害され、川に捨てられた。巨大なレンガ壁のモニュメントは、廃墟の印象を与え、バングラデシュへの破壊と、壊れた記憶を象徴している。真ん中に空間が開き、未来への希望を象徴。LWM理事による趣旨説明。
PM４：30　オープニングセレモニー
開会式。参加者（フィリピン、タイ、日本、インド、パキスタン、カンボジア）挨拶があり、民俗舞踊鑑賞と交流会。政府関係者や国立博物館関係者と交流。 開会式でパキスタンからの参加者アマド・サリム（Ahamad Salim）博士が、バングラデシュ人に対して謝罪の言葉を述べ、拍手を受けたのが印象的であった。
PM７：00　LWM（解放戦線博物館）視察
LWM理事とガイドによる案内、参加博物館のポスター展示と各博物館による紹介。
PM８：00　参加博物館のポスターセッションと夕食会
LWM職員や参加者と交流。

９月８日（コミラ、バングラデシュ）
AM11：30　セッション１
第１回ミーティングの振り返り、Coalitionの説明、参加者発表 Sabarmati Ghandi Ashram（インド）：ガンジーの家。ユースキャンプの開催地。 Nonviolence International（タイ）：非暴力活動推進団体。政情不安の影響など報告
PM３：00　セッション２(各国参加者による発表)
立命館大学国際平和ミュージアム（日本、兼清発表）：概要説明 Ghandi Ahsram Trust（インド）：概要説明 Toul Sleng Genocide Museum（カンボジア）：外国の要人訪問など、近年認知度上昇。クメールルージュによる虐殺の博物館。 質疑応答では、KMWPへ質問が集中した（添付資料５） 発表や直後の交流を通し、KMWPが歴史を見つめ、平和創出のために何ができるかを問いかけてきた活動を参加者に伝え、高い評価を得たることができた。
PM５：00　セッション３（各国参加者による発表）
Hetaga Bhaban（インド）：研究概要説明 Hadsha Khan Centre（パキスタン）：1971年の虐殺の前哨となった事例研究紹介。 Museum of Courage and Resistance（フィリピン）：活動内容紹介。先住民支援等。 質疑応答：質問は、Hadsha Khan Centreへ集中。虐殺の歴史研究の進捗状況やバングラデシュとパキスタンの和解の可能性について活発な議論が行われた。
PM７：30　民族舞踏と音楽（タゴール（ベンガル人）の詩など）と夕食

9月9日（コミラ、バングラデシュ）
AM９：00　セッション４（バングラデシュ参加者による発表）
LWM:LWMと移動博物館の説明 Bangabandhu Smriti Jadughar：建国の父バンゴバンデュが暗殺された家 Jahanara Imam Memorial Museum：女性活動家の家 Mohammad Sayedur Folk Heritage Museum：民話収集研究者の記念博物館 Jamalpur Ghandi Ashram：建設計画について 質疑応答：文化の保持と民話収集、特にパキスタンの民話研究所との比較など。
AM10：45　LWMの移動博物館見学
バスを移動博物館に改造し、写真を中心とした展示。国連人権宣言のパネルも展示。学校をまわり、移動博物館見学と独立戦争のドキュメンタリー鑑賞を通してジェノサイドの惨禍と人権についての教育を行い、その後、生徒に家庭で聞き取りをさせて、先生が集約してLWMで保管する。教育を通したオーラルヒストリーのコレクション形成。これまでに17万人以上の生徒が見学。
AM11：00　セッション５（ユースキャンプについての議論）
第１回の参加者による報告（ワークショップの内容や、事後の活動など） 今後のキャンプのあり方について（参加者は15～20名、場所はサバルマティ・ガンジー・アシュラム（インド）に固定、２回目は来年１月30日～２月５日。対象者は18～30歳くらい、旅費は次回は「歴史的場所に立つ良心の博物館の国際連合」負担、以降は負担可能な博物館は自己負担
PM３：00　セッション６（今後の活動について、閉会）
今後の活動について下記が提起され、各館における取り組みが要請された。
PM６：00　自由時間（コミラ市街をLWM職員の案内で観光）

9月10日（コミラ、ダッカ、バングラデシュ）
AM９：00　コミラの図書館と学校を見学し、そこで行われるLWMの移動博物館プログラムの実施状況を視察。
生徒から、日本にも独立戦争はあったか、なぜ、日本人がバングラデシュの解放戦争に興味を持つのか質問を受けた。
PM３：30　LWM訪問
資料室見学、資料保存担当者、LWM理事ハク氏と意見交換。LWMは世界平和博物館会議への参加の意向を表明、2008年にダッカでジェノサイド国際会議開催予定などの情報交換、資料保存の問題点についての意見交換、また、KMWPにおいて解放戦線博物館の資料展示の可能性について打診を受けた。

3　バングラデシュ解放戦争博物館（LWM）

Museum of Conscienceの一例として「歴史的場所に立つ良心の博物館の国際連合」発足時からの加盟博物館であるバングラデシュの解放戦争博物館を考察する。

第二次世界大戦後、バングラデシュは東パキスタンとなり、言語や宗教の違うパキスタンから文化的抑圧を受けた。これに抵抗し、独立を求める運動は次第に盛んとなり解放戦争が起こったが、この過程でパキスタンからジェノサイド的虐殺も受けた。

解放戦争博物館は、この一連の歴史を記憶するため、1996年に設立された、「自由と独立のためにバングラデシュの人々が払った犠牲を証言し、自由を愛するすべての人々と、宗教、民族、領土統一の名の下に虐殺された人々のための」博物館である。

約１万点の資料（2004年現在。文書、写真、新聞記事、解放戦争参加者の遺品など）を所蔵し、うち1300点程度を展示している。展示はベンガルの文明の歴史からイギリス植民地時代、パキスタン支配の時代、独立運動とジェノサイド、解放戦争の４つに区分されている。博物館の建物はイギリス植民地時代の建築物で、入り口には解放戦争犠牲者への追悼の碑が立っている。館内には展示案内をするガイドもいる。

独立運動とジェノサイド展示では、殺害された人々の様子を伝える写真や、世界の反応、犠牲となった解放戦争参加者の活動や殺害の様子が遺品とともに紹介されている。ガラスケースの中に、解放戦争参加者の写真、経歴、衣服や所持品などの遺品が展示されていることが多い。当時の武器など大型資料もあるが、見る者にもっとも衝撃的を与えるのは、ガラスケースの中に詰めこまれた頭蓋骨や骨（発掘遺体）である。子供たちには衝撃が強すぎるため、カーテンをつけて覆い隠すこともできるよう工夫されている。また、ジェノサイド発生時に性暴力も多発したため、レイプされ、殺害された女性の半裸死体写真も展示されている。無残な暴力の実態をどう提示するかという課題は負の遺産を展示するすべての博物館に共通の課題だが、解放戦争博物館では、現実を伝えるという方法で取り組んでいることがわかる。バングラデシュでは現在も事件の報道に生々しい死体の写真が掲載される傾向があ

り、報道文化が影響している可能性も考えられる。

展示室内に空調は無く、ガラスケースには破損もあり、ケース内はほこりが目立ち、内部の資料も温度や湿度や光の影響を直接受けている。展示室の照明は蛍光灯が多く、出入り口からは自然光も入り、資料には退色やカビが目立つ。展示ケースや空調整備ができない財政経済事情（また空調をつけたところで、停電が頻発）、また日本以上に高温多湿な環境での資料保存と展示の課題が大きいことがよくわかる。日本の博物館の水準から見れば「悲惨」な状態であるが、バングラデシュは世界で最も貧しい国のひとつであり、その社会の中で、これだけの資料を集め、展示を行っていることは、むしろ積極的に評価できる。酸性紙問題にもとりくみ、手紙など文書資料の脱酸性処理を行い、プラスティックフィルムにはさんで文書を保存している。保存されている文書は、パキスタンによるジェノサイド的虐殺の証拠であり、パキスタンがジェノサイドを否認する今日、博物館は証拠保全の役割も果たしている。たとえ何年かかっても、カンボジアのように虐殺の国際法廷を実現し事実を明らかにすることは、博物館のまた、バングラデシュの人々の悲願である。

建物には展示室のほかに、事務室と学芸用作業室兼収蔵庫、野外舞台と売店を備えた中庭があり、庭では飲食もできるようになっている。また、別棟に、会議室、事務室、ミュージアムショップがある。

解放戦争博物館は常設展示以外にも、解放戦争記念行事、移動博物館、移動博物館に付随した聞き取り調査と人権教育プログラムにも力を入れている。また、歴史的な記憶の場の管理も行い、虐殺の歴史遺跡の整備とその場所の記憶を伝える取り組みをしている。

移動博物館は、ダッカを訪れることができない地方の子供たちにも歴史を伝えるため、改造して内部に展示を作ったバスである。この移動博物館の見学には、解放戦争の歴史を伝えるフィルムの上映、人権について学ぶ展示（国連の人権宣言など）、そして、子供たちが家族に解放戦争の様子を聞く、聞きとりが同時に行われる。聞きとりにおいては、解放戦争から30年以上が経ち、記憶が風化する中、家族の中でも解放戦争の歴史に向き合い、子供たちに記憶を継承する機会を与えている。また、識字率の低いバングラデシュにとって、学校で読み書きを学んだ子供が家族から聞き取りをすることは、証言を集める現実的な手段でもある。子供たちが集めた証言は、博物館で保管されている。今回会議に参加したカンボジアの博物館も、この移動博物館形式のプログラムの導入に積極的であり、アジアの平和博物館がそれぞれにできる範囲で証言の収集に力を入れている姿勢が見えた。

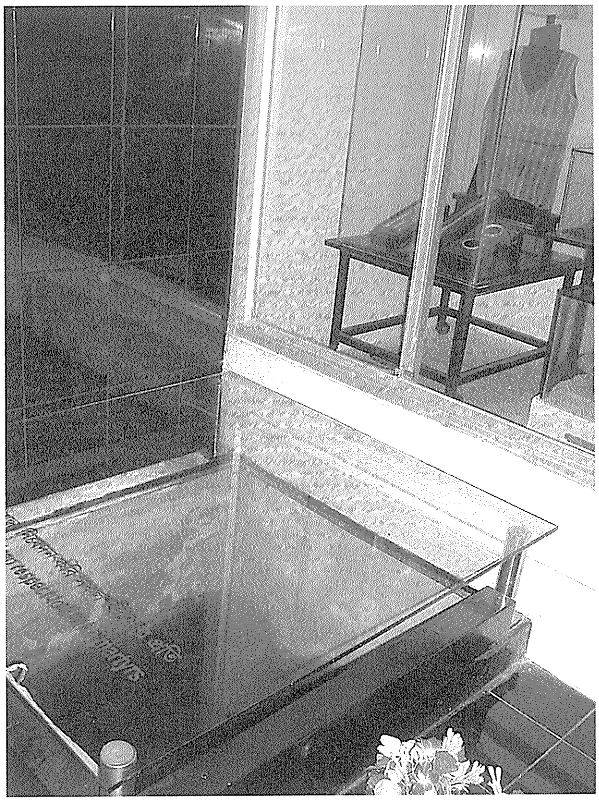
歴史的な記憶の場を保存するため、解放戦争博物館は2007年夏に新たにポンプハウス虐殺跡を整備した。現在この付近はダッカ市内でも貧しい地域で、スウェットショップや、貧しい住宅、露店に囲まれているが、1971年当時は人気のない湿地帯であり、多くの人びとがここへ連行され、殺害され、遺棄された。1999年の調査では5000体に上る遺体が発掘されている。レンガ造りのあずまや、地面に折り重なる遺体と太陽（再び立ち上がることを象徴）をモチーフとしたレンガの壁画、記念碑、記念室から成る。敷地は狭いが、レンガは明るい色で、庭には花も植えられている。門前には護衛が立ち、比較的高い塀で道路と隔てられ、内部はよく整備されている。

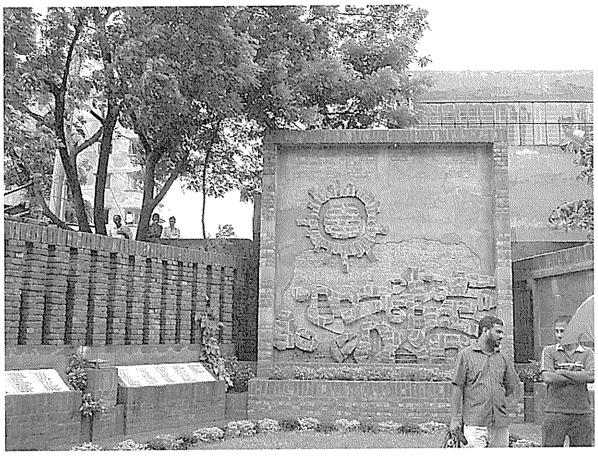
記念碑は、敷地の内周にそって並ぶ石のプレート、土の盛られた器、そして壁のプレートである。プレートには、400以上にのぼるバングラデシュ全土の虐殺の跡地、20世紀のジェノサイド（アルメニア、ナチによるジェノサイド、カンボジア、ルワンダなど。近年のスーダンのジェノサイドについても記されており、スーダンのジェノサイドを記した世界最初の記念碑である可能性が高い）が刻まれている。土は、虐殺の跡地から採取されたもので、地名が記され、記憶を語る証として設営されている。

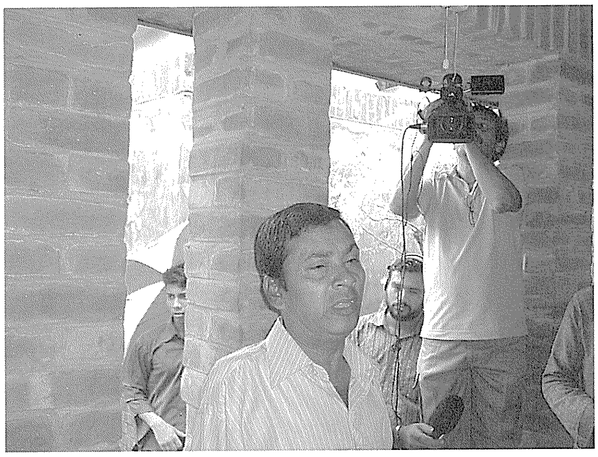
記念室は半地下になっており、暗く狭い。内装には黒い石とガラスが用いられ、正面のガラスケースには、犠牲者の遺品や写真が収められている。また、ガラスケース下には、遺体が投げ捨てられた井戸が、深く口をあけているのが、ガラス越しに見える。記念室隣のガゼーボもレンガ造りで、中央にピクニックテーブルのようなテーブルセットがあり、角には、この場所の犠牲者の記録、ジェノサイド条約などの裁きに関する文書、バングラデシュ全土の虐殺跡地の情報を記したファイルが設置されている。

こうした出来事の提示方法には、バングラデシュ人に対する虐殺がジェノサイドであったと訴える目的が明確化されているが、二十世紀の代表的なジェノサイドすべてを考察し、人類全体に対する犯罪としてより広範な枠組みの中にこの場所での虐殺を位置づけていることは、悲惨さを訴え、出来事の認知を求めるだけでなく、その根拠となる学術的な背景をも考察した成果である。

視察で訪れた際、あずまやでは、４人の証人（殺害されかかったが生き延びた人、家族を殺害された人）







写真：
左上段、記念室内の展示
左下段、壁画
右上段、記念室内の井戸
右中段、９歳のときジェノサイドを生き延びた生存者
右下段、記念碑

を聞いた。当時９歳であったが、ベンガル人であるという理由で殺害された（が、奇跡的に命をとりとめて生還した）男性は、週末にはよくここを訪れ、証言をするという。また、解放戦士であった父親をこの場所で殺害された姉妹は、当時幼く、父の記憶は薄れているが、子供のころは、いつか父が帰ると信じ、家に男性が訪れる度に、父親であるか尋ねたという。

この記念公園のデザイナーによれば、敷地自体を道路から下げているのは、ジェノサイドという記憶のそこへ入っていくことを象徴的に演出している。特に、記念室に入る際にさらに暗い半地下へおりてゆくことは、暗い記憶のなかへ足を踏み入れることを象徴している。そして、内装に用いた黒い石は、深い悲しみを表している。また、レンガは、ベンガル地方特産で、安価な建築資材である。

４　終わりに

解放戦争博物館では、博物館活動を通じて平和創出のために努力する博物館が直面する課題と、その現実の中でつむぎだされる成果を見ることができた。解放戦争博物館が資料保存や展示環境において抱える課題は大きい。これは、決して豊かとはいえない地域の博物館が抱える宿命である。たとえ援助を受けて環境をコントロールできる設備を導入したところで、１度の大規模な停電ですべてが失われる可能性もある。しかし、解放戦争博物館は、限られた資源の配分において文書資料の脱酸作業や、現実的な手段を用いた証言収集など、否認がジェノサイドの最終段階であるというこれまでの学術研究の成果を踏まえた取捨選択をしている。また、その歴史を、より大きな枠組みの中に提示し、自らの悲劇をより普遍的な人権の重要性を訴える契機としている。

移動博物館と付随プログラムが他の地域の平和博物館に導入されようとしているように、平和博物館同士が交流を深めることで、蓄積を共有し活動の質を高めることは可能である。また、国際平和博物館会議などの場で、こうした小さな博物館の現実に即した課題とその解決について論じることも、世界の平和博物館の前進に、大きな役割を果たすであろう。

（立命館大学国際平和ミュージアム学芸員）